英国一七世紀思想史研究序説

——経験論の成立とケムブリジ・プラトン主義——

中里良男

一

元来、西洋哲学史の上で、英国の代表的哲学といえば、「経験論」empiricism は「合理論」rationalism に対立させられて論じられている。そして経験論といえば、ロック John Locke (1632—1704)、バークリ George Berkeley (1684—1753)、ヒューム David Hume (1711—1776) という各思想家の系列のもとに、共通に一貫していると理解される体系を総括して、彼らの主張にかかる名称を付与したものと考えられてきた。

そして、経験論のトリオとしてロック、バークリ、ヒュームの、しかも「知識の問題」を中心テーマとしてとりあげた各思想家の著述をとりあげて、知識の起源として「経験」を共通に主張している観点から、このような「経験論」という哲学史上の思潮が観念論 idealism との関連において位置づけられ、しかも英国における思想の展開が直ちに英国経験論の歴史であるとみなされる通説が生じた。たしかに、かかる哲学史上の、通説ともいえる解釈は現代にいたる各哲学思想の特色を概略的にでも把握する観点からはきわめて便利、且つ効果がある。だが、人間の知識の源泉、

機能、知識の限界等を哲学の主要な課題と解釈し、もっぱら「認識論」を哲学の中心課題と主張する哲学者の一団によって上記の如き、「経験論」の哲学史上の位置づけが行われたのである。例えば、新カント派、とくにヴィンデルバント Wilhelm Windelband (1848—1915) 等の哲学史がそのもっともよき例を示すであろうし、また、哲学史の研究に主力を傾注し、ヴィンデルバントをその門下から育てあげたK・フィッシャー Kuno Fischer (1824—1907) の哲学史上の業績にまで「経験論」の定説化は遡ると考えられる。

さて、これ等の経験論者の主著と目されるものをとりあげてみる。まず最初に登場するのがロックの『人間知性論』Essay concerning Human Understanding 1690 であるが、ロックは自ら次のように語っている。友人たちと「この著述(『人間知性論』)とはきわめて疎遠な問題」を議論しているとき、解決の困難を感じ、「われわれ自身の能力を検討し、……われわれ自身の知性の対象が何であるかを考察する」[1]ことが問題解決に欠くべからざるものであると考えたと述べている。そしてロックのいう「疎遠な問題」とはフレーザー Alexander Campbell Fraser (1819—1914) によれば自然神学と啓示神学との問題、とくに「啓示」の解釈である[2]。また、ロックの伝記としてはもっともスタンダードな著述を表わしたクランストンによれば、一六七一年、この問題を議論していた友人のひとりであり、ロックと一生、親しく交際を続けたジェームズ・ティレル James Tyrrell? の言う所を引用し、このときの議題は「道徳と啓示宗教の原則に関する」ものであったという[3]。事実、ロックの宗教に関する著述を枚挙すれば、一七六七年頃の著作と推定されている『宗教的寛容に関するエッセイ』、一七八五年の、有名な『宗教的寛容に関する書簡』、さらに一七九五年の『聖書に述べられたキリスト教の合理性』等、初期の神学的著述を加えれば、エアロンのいうように宗教論上の著述は「量においては『人間知性論』をさらに凌駕するものであった」[4]。ロックが晩年、宗教的寛容を強力に推進さ

る著作を世に訴えるにいたった歴史的背景としては、王政復古後、当然の傾向としてチャアルズ二世によるカトリック政策の強化に対する反撥があったことも充分に考えられるが、やはり、彼が過去に経験した清教徒革命の印象が深く心に刻みこまれて居り、宗教の問題が彼の一生を貫ぬく関心事であったといっても過言ではあるまい。

『人間知性論』は一六九〇年に出版されているが一六九四年、一六九七年と版を重ねている。この事実はロックのこの著述が時代の問題に正面から対決しているが故に、多くの読者を獲得したのであるという理由よりも、むしろ、それ以前にロックが政治、宗教について多くの著述を表わしており、すでに思想家として著名であったという理由に依ると思われる。

ロックの『人間知性論』の内容が示す数々のテーマはたしかに同時代人にとっては無味、乾燥で、抽象的な議論の展開と、時として重復した問題のたて方は一般の知識階級にはなじまぬものがあったであろう。経験論の三主要著述としてロックの『人間知性論』のあとにつづく、バークリの『人知原理論』Treatise concerning the Principles of Human Knowledge はダブリンより一七一〇年に出版されているが、当時、あまり注目を惹かなかったもののようである。それよりもむしろ、一七三二年刊の『アルシフロン』Alciphron 及び一七四四年刊の『サイリス』Siris の両著が同時代の思想界に大きな影響を与えたのである。その理由は『アルシフロン』『サイリス』が当時、大きな衝撃を与えたシャフッベリー Third Earl of Shafesbury (1671—1713) の主張、及びマンドヴィル Bernard de Mandeville(1690—1733) の所説を批判し論駁を加えたものであるが故に一般の知識人にむかえられたものであるらしい。いうまでもなく、シャフッベリーは道徳的行為の判断基準となるものが人間に共通に与えられているモラル・センス moral sense である

とし、前時代の「神の似像」Imago Deiである理性が道徳的判断の主体ではないと強調した。[5] また、マンドヴィルは自己の利益の追求が同時に利他に通じ、社会公共の利益を増進する、という当時にあってはきわめて大胆な理論を展開した。今日のわれわれからみれば、いわばヒューマニズムの倫理をこれら両者が主張し、何等、異とするに足らないと感じられようが、一七世紀後半から一八世紀の前半にいたっても依然として同時代の多数の人々の関心事はキリスト教神学の解釈にあった。フレーザーはバークリの諸著述のうちでもっとも多く当時のひとびとに読まれたものが『アルシフロン』であると述べている。[6] 実に『アルシフロン』は「自由思想家 Free-Thinkers と称されるひとびとに対するキリスト教護教論」であった。また『人知原理論』にしてもその内容は知識論、とくに知覚の問題であるが、この著述の副題は「諸学問の過誤および難点の主要原因ならびに懐疑論・無神論・無宗教の根拠を探究する」とあり、聖職者たるバークリにとっては自己の信仰を強力に展開する手段として当時、ニュー・フィロソフィとして知識階級に受容されるにいたったボイル Robert Boyle (1627—1691)、ニュートン Sir Isaac Newton (1642—1727) の業績を対象としてとりあげ、そこから当然帰納されると目される宗教上のさまざまの異説の発生を恐れたのであろう。

最後にD・ヒュームが登場する。ヒュームの研究はE・M・モスナーの『ダヴッド・ヒューム』に掲載されているヒュームと同時代のヒューム批判より、一九五四年にいたるまでの彼の政治、宗教、哲学に対する実におびただしい研究文献に加え、[7] 英国においてはモーア George Edward Moore (1873—1958) 及びラッセル Bertrand Russel (1872—1970) を先駆とする分析哲学、及びヨーロッパ大陸においては一九世紀末からウィーン大学を中心として結成されたウィーン学団の論理実証主義の二十世紀初頭より現在にいたる思潮は、第二次世界大戦以後の実存哲学と並行して強力な流れを示しており、当然のこと乍らこれら分析哲学者のなかから、その主張の源泉であるヒュームの哲学について多く

の研究者、及び研究書が出版されている。[8]

さて、ヒュームの哲学であるが、現代の視点からすれば『人性論』A Treatise of Human Nature (1739—1740) がヒューム哲学の核心であり、ヒューム研究者はいずれも『人性論』を研究の対象としてとりあげている。しかし、ヒューム自身の語るところによれば、この大部の著述は「印刷機から死んだまま生れた」[9]というほど、何らの反響を世に与えなかったのである。時に彼は三十歳に満たず、気鋭の気に充満せる作品であるが、現在のわれわれにもその理解には難渋を要するものである。それ故、当時のひとびとにはいっそう歓迎されなかったもののようである。ヒュームはこれにこりてエッセイ形式で『人性論』第一篇「知性について」を書き改め『人間悟性論』An Enquiry concerning Human Understanding を一七四七年に刊行した。この『悟性論』が哲学者としてのヒュームの位置を同時代の哲学界に確立させ、さらに、あまりにも有名な言葉であるが、ヒュームの因果律に対する徹底的批判から生じた懐疑論が「カントを独断論の眠りから呼び覚まし」たのである。[10]

『人性論』は「実験的論究方法を精神上の主題 (moral subjects) に導入するひとつの企画」のために執筆されたものであり、『人性論』の副題が以上の引用である。そして、その内容は数学、自然哲学、自然宗教等の諸問題を掘りさげ、これらの諸学問が人間性に根ざしているものであることを解明し、そして諸学問の進歩、改善を計ったものであると述べている。そして、とくにこのような方法による問題解決へのアプローチは「自然神学」に関して望ましいと言明し、その著述の第三巻においては道徳の問題を論じている。しかし、先に述べた如く、この哲学史上の偉大なモニュメントといえる『人性論』は読者の意にかなわず、ヒュームはその著述の第三巻を書き改め『道徳原理の研究』An Enquiry concerning the Principles of Morale 1751' をあらわした。ヒュームにとっては『悟性論』とこの著述が

会心の作であり、そのうえ、多くの好評を博したと自伝で述べている。

以上、ロック、バークリ、ヒュームのそれぞれ「経験論」の三主要著述が同時代のひとびとの関心から遠いものであることを示し、これ等の哲学者たちの主要な関心は、ロックの場合には政治と宗教との諸問題であり、バークリの場合も、さらにヒュームの場合も神学、道徳の問題がいかに重要なものであったかをごく粗略ではあるが瞥見してきた。つまり、後世の哲学史家がとりあげる知識の問題は彼らにとっては問題解決のひとつの方法を提示したものであった、といってよいであろう。それでは、これらの哲学者の意図に反し知識の問題を論ずる著述を彼らの主要著述と認め、経験論のもとに総括させた原因は何であったか。

それは十八世紀の終りより十九世紀の後半にかけて世界の思想界に多大の影響を与えたドイツ観念論の潮流であろう。更にこの点をミクロな視点から考えてみると、英国においては、まずカントの哲学がコールリジ Samuel Taylor Coleridge (1772—1834) によって、ヘーゲルの場合はグリーン Thomas Hill Green (1836—1882) に始まるオクスフォードを中心とする哲学者の集団が積極的なドイツ観念論の摂取とこの観念論にもとづく展開を示し、[11] 彼らの視点から「経験論」はひとつのスクールとして形成されたように思われる。

二

だが、ここでどうしても見のがすことのできぬ、そしてドイツ哲学の英国における受容以前に、現在では歴史のなかに埋没したかに見えるひとつの学派が存在する。それは哲学史上スコットランドの諸大学に端を発する「常識哲学」Common Sense Philosophy の流れである。アバディーン大学で哲学を講ずるリード Thomas Reid (1710—1796) が毎

週一回の研究サークルを主催し、この研究会が多年に渡って継続され、一八世紀後半にスコットランド思想界に大きな影響を与えた。

一七六四年、リードは『人間精神の研究』Inquiry into the Human Mind を著わした。この処女作はヒュームの懐疑論を対象としたものであるが、彼は刊行前、ヒュームにその草稿の一読を依頼した。だがヒュームはその草稿に展開されている論旨から自己の著述に対する一大脅威を感じたものとみえる。そして、多分の皮肉をこめて、リードに哲学的討論をするよりは他の人にその草稿の一覧をすすめている。ヒュームにリードが草稿の閲覧を依頼したのは当時、ヒュームがスコットランド出身の、英国のみならず、ヨーロッパにも著名な思想家であり、ヒュームの懐疑論に共鳴する多数のひとびとが存在している事実をリードは考慮し処女作の閲読を依頼したものと思われる。この年(一七六四年)リードはアダム・スミス Adam Smith(1723—1790)のあとを嗣ぎ、グラスゴー大学、モラル・フィロソフィの教授就任をグラスゴー大学より依頼されて就任し、哲学の研究に専念する環境を得たが、哲学の講義、研究よりも教授職にともなう諸校務に忙殺され、終に一七八〇年に一切の公職より退き、自己の思索の体系化に専念し『人間の知的能力についてのエッセイ』Essays on the Intellectual Powers of Man を一七八五年に著わした。

おそらく、このリードの著述が初めて、ロック、バークリ、ヒュームという経験論の系譜が完成される端緒を与えたのではないかと筆者は推定する。リードは、ヒュームが懐疑論におちいらざるを得なかったのは、まさしく、デカルト René Descartes (1596—1650)、ロック以来の哲学の結論である、と確信したのである。

経験論はいうまでもなく、ロックのいう通り、人間の心は本来、白紙であり、人間と環境との接触点である人間の「経験」を通じて人間の知識は形成されると主張する。ヒュームにいたっては「印象」impression が知識の源泉であ

る。そして、ヒュームにとって、人間の心というものは、この「印象」が程度の稀薄化した「観念」idea の去来するひとつの「舞台」にすぎぬ。それ故、経験論は知識の源泉として「知覚」を重視するあまり、たとえば、バークリの如き「知覚は存在である」esse est percipi という独我論（ソリプシズム）におちいり、主観に対して、客観の側面を重視する基本的立場に立脚し乍ら、かえって主観的観念論におちいり、外界の実在はなんら理論的には保証されず、伝統的「習慣」に依拠せざるを得ないという、即ち、理論に対するきわめてネガティヴな結論に到達する。かかるヒュームの、理論を追求する人間の機能である理性に対する悲観的結論は、一面よりいえば一種の非合理主義を示し、ヒュームの「人間は情念の奴隷である」という立言にいたる。

リードは、デカルト、ロック以来、哲学界に普及し、且つ立論の前提となった、知覚、記憶、概念等の「心の働らき」mental acts の対象が「心のなかにあるアイデア」ideas in the mind にある、という視点をまず批判の対象とした。そして外界の実在、自然の斉一性等、いわば、われわれの日常生活においては何ら疑問としない知覚の直接的対象を論理的に保証する理論の建設を課題とした。

そのためにロック、バークリ、ヒュームの「知識論」を方法論的見地から批判し、「知覚作用における心の能動性」を例証し、主張した。その際、リードにおいて、ロック、バークリ、ヒュームの前提となった「観念理論」theory of ideas が一括して論及されている。もちろん、リードは彼等の哲学を「経験論」として一括し、位置づけてはいない。しかし、リードの批判がすくなくとも哲学史上、「経験論」成立の転機を与えたと筆者には思われる。(12)

現在、合理論対経験論という哲学史における設定は無意味の状況下におかれているように思われる。一九世紀中葉においてはまだ、観念論対唯物論という設定のもとにいく多の議論が展開されたが、十九世紀末より哲学史の舞台に

登場した論理実証主義、その展開である分析哲学の興隆、一方、現象学の発展はすでに経験論対合理論という古典的な哲学史上の規定をすて去る傾向にある。

三

そこで経験論の祖と規定されるJ・ロックの時代にさかのぼり、一七世紀の英国の思想的風土のなかに、いわゆる「知識論」を哲学の中心課題とすべきファクターがいかなるものであるかを考えてみたい。周知の如く、一七世紀の英国は政治的には動乱の時代であり、科学の領域においては「科学革命」が頂点に達した時代である。さらに英国に於ては宗教改革が多分に政治的原因から展開した。そして、ピューリタニズム[13]の抬頭が政治、経済その他、あらゆる社会制度の、自然科学の発展をも含めて近代化の重要な原因としてとりあげられてきた。たしかに、プロテスタンティズムが近代英国の形成に重要な役割りを演じたことは事実であろう。しかし、ピューリタニズムのみに近代英国の起源を求める研究はあまりに一面的であるようにみえる。英国国教会とプロテスタント各派の関係は、まことに複雑きわまる様相を示している。在来、その研究が等閑視されてきたものにケムブリジ・プラトン主義がある。また、アングリカン・チャーチ（英国国教会）に所属する聖職者の歴史的役割りも同様であろう。

まず一七世紀の英国思想界に一大旋風をまきおこしたのはホッブズ Thomas Hobbes (1588—1679) である。彼の生存した時代はチャアルズ一世の処刑、クロムウェル Oliver Cromwell (1599—1658) の「共和国」設立、クロムウェル死後の混乱、チャアルズ二世による王政復古、そして議会と王室の対立等、多かれ少かれ、当時の知識人はこの混乱の渦中より抜けでていることは不可能であった、といってよいであろう。

ホッブズによって社会科学の基礎をなす社会哲学が形成されたといえる。その主著はいうまでもなく『レヴァイアサン』Leviathan, London 1651 であるが、すでに彼の『市民論』Elementa Philosophica de Cive, 1639、同書の英訳 Philosophical Rudiments Concerning Government and Society, London 1651 にはホッブズの主張がよく表現されている。

「自然状態においては、あらゆる人間は（他者）を傷つけようとする欲求と意志をもち」[14]「人間が社会状態に入る以前の人間の本来の在り方は斗争のみであった……[15]万人の万人に対する斗争 a war of all men against all men であった。」また「政府の存在以前には、正、不正は存在しなかったのである。……すべての行為は本来、無差別である。すなわち、統治者の権利から正、不正が生ずる」[16]

現在のわれわれからみれば、ホッブズの提唱した「自然状態における人間」対「社会」また別の表現をつかえば、「自然」対「人為」という方法論的な分析概念の発見は高く評価さるべきであろう。まさにホッブズによって「社会」が発見されたといってよい。そして、「自然状態における人間」という作業仮設は「自然権」の思想を生誕させ、ロックにも多大の影響を与えた。だが、ホッブズと同時代人にとっては「万人の万人に対する斗争」が人間本来の在り方であるという主張や、徹底せる唯物論は、とくに聖職者にとって多大な脅威であった。もちろん、ホッブズはかかる自然状態の脱却に「正しき理性」Right Reason の使用を唱えている。すなわち、「平和を手に入れる希望がある場合には平和を求めることが……正しい理性の命令、すなわち、自然の法則である」[17]と彼は述べている。動乱の故国英国を忘命し、多年パリで窮迫の生活を送ったホッブズにとって平和こそ、もっとも望ましきものであった。そして、この平和への希望は自然の命ずる第一法則である。ホッブズは契約の遵守を次に第二の自然法としてかかげ、次々に

二十条の法則を枚挙している。そしてかかる自然法は神の永遠の言葉にしたがい、神自身が人間に宣言したものであるという。ホッブズにとってこのような「神」とはいかなるものであろうか。この問題は当時の宗教、もちろん、キリスト教であるがキリスト教神学の複雑な背景を充分に考慮にいれて考えねばならないであろう。(18)

ホッブズの市民法 civil law は自然法を現実に履行する条件として要請されるが、ここで市民法の機能を行使する主権の存在が大きく浮びあがってくる。ホッブズの絶対主義はここに成立する。ホッブズは道徳の根拠を人為に、すなわち、社会の成立とさらに主権者の成立をもって根拠づけている。かかるホッブズの、当時の言葉をもってすれば Hobbism(ホッビズム) に対してまず、彼の決定論的唯物論に対して自由意志を主張し、道徳の根拠は人間の先天的利他性にあることを主張した一群の哲学者が存在する。

四

ケムブリジ・プラトン主義者として哲学史上規定されているひとびとがそれである。ホウィッチコート Benjamin Whichcoat (1609—1683)、モーア Henry More (1614—1687)、スミス John Smith (1616—1652)、カドワース Ralf Cudworth(1617—1688) 等のひとびとである。これらの思想家はいずれもケムブリジ大学で教鞭をとり、そして、そのなかでもホウィッチコートは多分にピューリタン的心情を育成したケムブリジ大学のエマニュエル・カレッジで学生達に大きな影響を及ぼしたと伝えられている。これ等の思想家のなかでとくにモーアとカドワースが著目されよう。

モーアはケムブリジ大学のクライスト・カレッジに入学、そして一六三九年、同校のフェロー fellow に就任以来、一生自ら望んでこの地位にとどまった。このケムブリジ大学でまず、プラトンやプロティノス Plōtinos (204—

269）の著作を研究し、決定的な影響を蒙った。次にデカルトの著述に接し、一七世紀の英国にデカルト哲学を移植し発展させた。だが英国の思想家に最初衝撃を与えたのは彼の形而上学ではなく、「光学」「幾何学」等の自然哲学の著述であった。このデカルトへのモーアの傾倒は凄じく、一六四八年に書かれたと思われる彼の書簡には次のように述べられている。

「あなたの（デカルトの）の素晴らしい天才に比較すれば、過去の、そして現在なお生存している自然の秘密をマスターしたすべてのひとびとも、あきらかに一寸法師や小びとのようにみえる」[19]

モーアはデカルトの『光学』『幾何学』その他の著述を一六四九年に講義している。この事実は一六四五年頃、一団の科学者によって形成され、インフォーマルではあるが数度の会合を開き、知識の交換を行い、オクスフォード大学で結成された『見えぬ学会』Invisible College の影響が強かったのであろう。後にボイルがイタリア留学を終了して帰国してからは、この学会が母胎となって一六六二年、王政復古を記念してチャアルズ二世によってロンドン王立協会 Royal Society of London が創立された。

モーアのデカルトへの傾斜及びのちになってデカルトの立場を拒否するにいたるモーアの姿勢は英国におけるデカルト哲学の展開を決定するものであった。[20] モーアがデカルトの著述に傾倒する以前すでにデカルトと接触をもっていた人物にはディグビー Sir Kenelm Digby（1603—1665）が居る。ディグビーはチャアルズ一世に仕え、「共和国」時代、「王党派」の重要人物として投獄されたことがあるが「王立協会」では第一流の人物であり、哲学的な著述もある。このディグビーがホッブズ宛、一六三七年の終り頃、送った書簡のなかでデカルトの著述を英国へ送ることを述べている。事実、『方法叙説』は出版されてから四箇月もたたぬうちに英国へ送られ、『省察』はその草稿がホッブズの批

判を求めてホッブズのもとへ、デカルトの親友であり、対外的事務処理を引きうけていたメルセンヌ Marin Mersenne (1588—1648) からおくられている。[21]

デカルトと一七世紀の英国の思想家の間にはこのような密接な関係があった。ケムブリジのプラトン主義者として、後世哲学史家によって規定される前記のひとびとはデカルトの哲学にホッブズに対する有力な反駁の根拠をみいだしたのである。しかし、モーアは一六七一年以後『形而上学要論』Enchiridion Metaphysicum において、デカルト説は宗教の敵であると述べるにいたっている。モーアのデカルトに対するこのような変化はデカルトの機械論的自然観に由来する。モーアは「プラトン代義とデカルト主義との折衷 interweaving」[22]を企図したが、デカルトの機械論的自然観では意識の存在の証明が不可能である点、次に運動の理論の不充分な点、等を批判し、新プラトン主義の形成的自然観を唱えたのである。[23] さらにモーアはデカルトの二元論を攻撃し、「延長」の概念を「精神的実体」の属性たらしめるという、今日のわれわれからすれば、まったく時代錯誤的な議論を展開するにいたったのである。モーアの「精神」spirits の存在に関する異常な熱意は妖怪や魔女の研究にまで発展した。元来詩人としても著述を残しているモーアにとって、デカルトの徹底した論理的傾向に対し、多分に神秘主義的な傾向をもち、深い宗教的心情を要求していたモーアの性格がこのようなデカルト哲学の拒否という帰結を招いたのであろう。しかし、モーアの新プラトン主義はニュートンがアリストテレスの自然学に対してとった態度と共通している側面を示して居り、両者の間に何らかの思想的系譜を、とくに「空間」の概念を媒介として求められるかもしれない。

モーアの次にカドワースが問題になるが、カッシラーによれば「カドワースの『宇宙の合理的体系』The True Intellectual System of Universe 1678 というものはフォリオ版で九〇〇頁の内容を含む大著であり、それも彼の企画の

一部を示すだけで、その論理の展開は単調をきわめる議論の進展をみせ、時として中心問題を逸脱するありさまであった。このような表現の方法をとることによってケムブリジ学派は自己の文学的運命をさだめてしまった」のである。モーアの『倫理学要論』Enchiridion Ethicum はこれに反し、一六九〇年及び一七〇一年にそれぞれ英訳が出版されている。また『霊の唄』Song of Souls という詩をもモーアはあらわし、当時、旧式のスコラスティシズム的煩瑣で単調な論理のはこびに対し、フロリオ John Florio (1553?—1625) 訳のモンテーニュの『エセー』The Essays of Michael Lord of Montaigne, 1603, 1613, 1632 がその新しいヒューマニスティックな思想とともに斬新な表現形態が思想界で歓迎されていたが、モーアもこの点では同調するものをもっていた。然し、概してきわめてアカデミックなものが主著であり、一部の専門的なサークルのなかでのみとりあげられたもののようである。カドワースの『永遠にして不滅恒久なる道徳についての試論』Treatise concerning Eternal and Immutable Morality は実に、彼の死後、一七三一年に及んでやっと発行されている事実はよくこの間の事情を物語ると思われる。

モーアがデカルトに対して拒否的態度を明らかにするとともにモーア以外の他の思想家も、とくに聖職者のあいだにこの傾向が波及して行った。デカルトにかわって一八世紀大陸における啓蒙思想の起点を示す思想家が英国に出現した。ニュートンとロックがそれである。この両者の著述がフランスの啓蒙思想家に与えた影響は周知の事実であろう。それでは、これ等のケムブリジの一群の哲学者たちはどのようなはたらきをしたのであろうか。彼等の思想内容の分析がもちろん必要であるが、ネガティヴな意味でJ・ロックに、すなわち、経験論への途を開いたといえよう。「ロックと同時代人のひとり、グランヴィルの言葉をつかえば、同じ年令に属し、同一の「思想的風土」に生長した著述家のなかに、思想の類似はさけることができない」[25]のである。このグランヴィルはモーアの友人というよりは、む

しろ、弟子ともいうべき聖職者である。ロックと同時代の文化的背景のもとに、同一の問題に直面し同一の素材を使用した諸思想家とロックの思想、両者間にどの程度、お互いに直接影響を与えたかは困難な、しかも、ともすれば危険を伴う作業であろう。しかし、ロックに与えた影響としては「まず、英国においてはケムブリジ・プラトン主義を典型とする神学上の自由主義的動向と広教主義 Latitudinarianism である。そしてオランダにおけるアルミニウスの主張である」[26]とエアロンは述べている。

いずれにせよ、一七世紀の英国は宗教改革と同時に「科学革命」を発展させた。「科学時代」といわれる今日、深い内面的心情より発する救済の念は現象的には影をひそめたように思われる。しかし、様々なかたちをとりながらもこの人間の、一見背反するかに見える科学的知識への傾斜と救済への願いは、人間の本性に深く根ざしているように筆者には思える。そこで、最初、この動乱の一七世紀英国に生れロックと同時代に生涯を終え、しかもほとんど論及されることのないJ・グランヴィルに焦点をあてて、この「科学と信仰」の問題を追求してみようと企図したが、ケムブリジ・プラトン主義の研究については、まず資料入手の面で甚しく困惑を感じた。筆者の手もとにあるものはグランヴィル、モーア、ともに僅か数冊の写真版の著述にすぎない。そこで、一応、英国の哲学といえば直ちに連想される「経験論」の成立過程に論及し、ついで一七世紀の文化的背景をスケッチした次第である。ウィレーの名著『十七世紀の思想的風土』(深瀬基寛訳、創文社、昭和四三年) Basil Willey: The Seventeenth Century Background-Studies in the Thought of the Age in Relation to Poetry and Religion 1953 に触発されたこと大であるが、この著述について哲学史家の間ではM・H・カレのわずか数行の論評しかみられないのは遺憾である。[27] いずれ、このケムブリジ・プラトン代義の研究については機会をみて発表したい所存である。

注

(1) J. Locke: Locke's Works. vol. I, Philosophical, 1872 (Bohn's Library) p. 118.

(2) Ed. by A. C. Fraser: Essay concerning Human Understanding. 1894, vol. I. Introduction.

(3) Maurice Cranston: John Locke. A Biography, 1957 p. 141.

(4) R. I. Aaron: John Locke, 1955.

(5) この点についてF・ハッチスンも同じくモラル・センスが人類の「良心」であることを力説するが、シャフツベリー、ハッチスンともにこの「良心」なるものは「神の呼ぶ声」Call of God と規定している。キリスト教の神とは決して断絶しているわけではない。ヒュームにいたってかかる、いわば実体論的に人類に共通に与えられた道徳的判断の主体である神の呼ぶ声あるいはそれ以前の神の似像としての理性は否定され、「功利性」utility の概念が個人の道徳的行為の起動的主体として登場し、同時に社会形成のひとつの要因として「共感」sympathy が考えられるに至ったと思われる。

(6) A. C. Fraser: Berkeley's Works 1901 vol. II. p. 2.

(7) E. C. Mossner: The Life of David Hume, 1954, p. 627—p. 640.

(8) ヒューム研究は、最近の傾向では分析哲学の側面からヒュームの示す科学論上の諸問題たとえば、知覚、確率、帰納等に解明を与えるものが多い。ヒューム研究の白眉として古典的名著であるN・K・スミス『D・ヒュームの哲学、その哲学の起源及び中心思想の批判的研究』N. K. Smith: The Philosophy of David Hume, 1941 は英国モラリストの代表者といえるF・ハッチスンにヒューム思想の出発点を推定した力作であり、ヒュームの意図が、倫理の問題解決にあることを実証的に例証し、且つハッチスンとの思想的交流の事実を明らかにしたものである。ヒューム倫理説では、P・S・アーダル『ヒュームの人性論における情念と価値』P. S. Ardal: Passion and Value *in* Hume's Treatise. 1966 がもっとも密度の濃い研究であり、この点でやや劣るが、P・マーサー『同情と倫理』——特にヒュームの人性論に関連せる同情と道徳性との間の諸関係の研究——P. Mercer: Sympathy and Ethics—A Study of the Relationship between Sympathy and Morality with special reference to Hume's Treatise 1972も力作の名に価する。

(9) D. Hume: An Enquiry concerning Human Understanding and selections from A Treatise of Human Nature—with Hume's Autobiography & A Letter from Adam Smith. Chicago. Open Court. pub. 1930 Autobiography. p. vii.

(10) このヒュームのカントに与えた影響の真偽性について、またその歴史的事実の研究については実に多くのカント研究者、及びヒュームの研究者が手がけている。この点について古典的な、且つ定説を示したものは次のものであろう。
E. Cassirer: Das Erkenntnisproblem zweiter Band. 1922. S. 606～610. ともに脚注。次に N. K. Smith: A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason' 1918. Introduction. II Historical—Kant's Relation to Hume and to Leibniz p. xxv–xxxviii. また同氏の The Philosophy of David Hume 1949. Introductory—Beattie and Hume p. 7–p. 8.

(11) この研究ではT・H・グリーンによるヒュームの著述の編集と出版、そしてグリーンのロック及びヒュームの認識論の解説と批判が大きな影響を与えた。Ed. by T. H. Green and T. H. Grose: The Philosophical Works of David Hume 4 vols は一七四二年の出版であり、グリーンのロック『知性論』及びヒュームの『人性論』の解説、(というよりはグリーンはヘーゲリアニズムの立場から経験論を克服するために著わしたとみなされる紹介と批判) は一九世紀の中葉からはJ・S・ミルやH・スペンサーを例外とはするが英国及びアメリカの講壇哲学者には大きな反響を呼んだものと思われる。そして、グリーンの流れを汲むミュアヘッドの、アメリカの哲学の潮流をも含めて John. H. Moirhead:The Platonic Tradition in Anglo-Saxon Philosophy 1931 は、より詳細にカント・ヘーゲル両哲学の英国思想界における受容と摂取を解明し、とくにヘーゲルを焦点とし、観念論的傾向がすでに十七世紀のケムブリジ・プラトン主義者に顕著にみられることを力説しているように思われる。

(12) Thomas Reid: Essays on the Intellectual Powers of Man. *Introduction by Barach A. Brody* M. I. T. Press Edition 1969 Essay II OF the Powers we have by Means of Our External Sense VIII Of the Common Theory of Perception, and of the Sentiments of the Peripatetics, and of Des cartes p. 133 IX. Of the Sentiments of Mr. Locke p. 153. X. Of the *Sentiments* of bishop Berkeley p. 167 XI. Bishop Berkeley's sentiments of the nature of ideas p. 186 XII. Of the sentiments of Mr. Hume p. 198. リードはロック、バークリ、ヒュームの前記の批判とともにアルノー Anthony Arnauld 及びライプニッツの体系をも批判している。おそらく、リードの主催するアバディーン・クラブ Aberdeen Club における討論及び、グラスゴー大学における研究がこのようなリードの著述を完成させるのに大きな寄与となったことは疑えない。おそらく「経験論」empiricism 対「合理論」rationalism という設定もスコットランド学派のなかで位置づけられたのではなかろうか。たとえば、N. E. D. vol. III. D–E Empiricism の項目に次の引用がみられる。

Philos. 1803 Edin(burgh) Rev(iew) I. 257 made acquainted with the division of empiricism and rationalism.

(13) 一七世紀におけるピューリタニズムがまことに無規定な用語であることはいうまでもない。この語の定義については浜林正夫『イギリス革命の思想構造』未来社、一九六六年、第一章、ピュウリタニズムの思想、一、ピュウリタニズムの定義、及び越智武臣『近代英国の起源』ミネルヴァ書房、昭和四一年、第三章、国民文化の生成、第二節、清教主義の本質、参照とくに四二四頁——四二七頁ここで「ピューリタン」という言葉が当時では、この言葉をもって呼ばれたひとにとっては「嫌悪すべき呼称」であったという事実を、バクスターの『遺稿集』を例証として著者はとりあげられている。そして、ピューリタニズムを歴史的概念として規定し、その社会的役割りを例証することがいかに困難であるかが述べられている。科学史の領域においても一七世紀において「科学革命」を推進させたローヤル・ソサイアティの各メンバーをピューリタニズムに関連させてきた在来の研究には大きな疑問が投げかけられている。Ed. by C. A. Russell: Science and Religious Belief-A Selections of Recent Historical Studies The Open University 1973 4 Religious Infulences in the Rise of Modern Science: Douglas S. Kemsley p. 74—p. 102.

(14) Thomas Hobbes: De Cive or the citizen. Ed. by S. P. Lamprecht. 1949. p. 25.

(15) ibid. p. 29.

(16) ibid. p. 129.

(17) ibid. p. 30.

(18) この問題につきホッブズと同時代の知識人の思想的連関を追求したものに Samuel I. Mintz: The Hunting of Leviathan. Cambridge 1970 がある。ホッブズを一七世紀英国の思想的動向にセットした著述では、この著述を凌駕するものは他にないと思われる。

(19) M. H. Carré: Phases of Thought in England. Oxford 1949. VII The New Philosophy p. 250.

(20) Alexander Koyré: From the Closed World to the Infinite Universe 1957-God and Space, Spirit and Matter-Henry More p. 125.

(21) Ed. by the Department Philos. of Columbia University: Studies in the History of Ideas vol III 1935—S. P. Lamprecht: The Rôle of Descartes in Seventeenth-Century England. p. 192.

(22) M. H. Carré ibidem, p. 265.
(23) Ernst Cassire: The Platonic Renaissance in England. Trans. by J. P. Pettegrove 4. The Position of Cambridge Platonism in the history of English thought p. 51.
(24) ibid. p. 159.
(25)(26) R. I. Aaron: ibid. p. 25.
(27) M. H. Carré: ibid. p. 278.

筆者は本学教授・哲学